

超高齢社会における「不安」の構造 第4報

— 自助・互助・共助・公助に関する意識調査

大 橋 美 幸

I. はじめに

自助・互助・共助・公助は、超高齢社会において多様な支援の提供を、実施主体や費用負担において区分した概念である。自助は「自分のことを自分でするという以外に、自費で一般的な市場サービスを購入するという方法も含まれる」¹⁾。公助も同様に、行政による直接的なサービス提供だけでなく「公の負担、すなわち税による負担」¹⁾をいう。介護保険や医療保険等の社会保険は「共助」とされる¹⁾こともあるが、「共助」は近隣の助け合いやソーシャルビジネスを含む²⁾こともあり、本報ではこれらを区別して、公的介護保険や医療保険等の社会保険は「公助」とし、近隣の助け合いや無償ボランティアを「互助」、有償のソーシャルビジネス、通常の店の高齢者への配慮やサービス等を「共助」とする。「互助」と「共助」の違いは無償であるか有償であるかである〔表Ⅰ〕。

表Ⅰ 自助・互助・共助・公助の区別

	主体	費用負担
自助	・ 自分 ・ 一般企業等の互助、共助、公助以外のサービス提供	自分
互助	・ 近隣、地域住民、NPO など	実費程度の無償ボランティア
共助	・ 一般企業の社会貢献、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネス、通常のサービス提供における高齢者への配慮	有料（一部公的補助もある）
公助	国、自治体、その委託先等	税金、社会保険（一部自己負担もある）

近年、公助の大幅な拡充が難しく自助・互助が求められている¹⁾なかで、既報において2011年度に創設されたサービス付き高齢者住宅と、近隣の助け合いを取り上げ、これらが超高齢社会における「不安」の解消につながるのかを考察した³⁾。サービス付き高齢者住宅は、バリアフリーに少なくとも安否確認、生活相談のサービスをつけた住宅であり、介護や医療等の付属していないサービスは必要に応じて外から利用する。実施主体は民間事業者であり、従来の介護保険施設の「公助」による住まいの提供を「自助」に置き換えるものである。近隣の助け合いは、当然のことながら無償の「互助」である。

サービス付き高齢者住宅は、選択肢の拡大として肯定的に受け止められており、近隣の助け合いは、認知症サポーター養成研修の受講や認知症の人に関わった経験によって手助けに差が見られるものの、「近所に認知症の人がいるので」と依頼されていれば多くの人が手助けをすると答えていた。

本稿では、サービス付き高齢者住宅、近隣の助け合いから広げて、自助・互助・共助・公助による多様な支援の提供方針が超高齢社会の「不安」に及ぼす影響を考察する。

Ⅱ. 調査概要

1. 調査方法

2012年6月、函館市内の講演会参加者を対象にアンケート調査を行った。講演会の内容は函館市のまちづくりに関するものであり、参加者は一般市民である。アンケートは講演会資料と共に配布し、講演会終了後、出口で回収した。アンケート項目は回答者基本属性(年代、性別)、高齢者の介護経験、「老い」や介護・認知症の不安、近隣の交流、自助・互助・共助・公助の支援希望等である。

自助・互助・共助・公助の支援希望は、買い物支援、家事支援、施設入所待ちに対する支援の3つの例をあげて尋ねた。買い物支援は「買い物に行く

ことが難しい高齢者」、家事支援は「食事の支度や洗濯が難しい高齢者」、施設入所待ちに対する支援は「在宅生活が難しく施設入所待ちをしている人」に対してどのような支援が望ましいと思うかを、自助（民間サービス購入）、互助（地域の助け合い）、共助（店や交通機関等の高齢者への配慮）、公助（公的サービス）の選択肢を設定した。

加えて地元における必要性・実現可能性を尋ねた。自助（公的サービス以外の民間サービス）、互助（地域の助け合い）、共助（店や交通機関等の高齢者への配慮）、公助（公的サービス）それぞれについて、充実が必要・現状維持・削減の必要性を尋ね、実施可能かどうかを尋ねた。

2. 回答者基本属性

配布数103、回収数88、回収率85.4%であった。

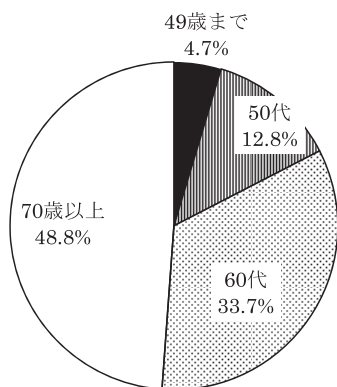
男性46人（60.5%）、女性30人（39.5%）、男性が多い。

年齢は49歳までが4人、50代が11人、60代が29人、70歳以上が42人。70歳以上が半数近い [図Ⅱ-1]。

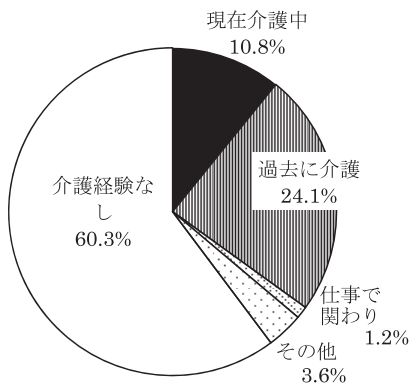
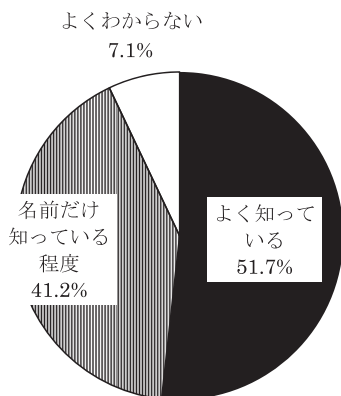
高齢者の介護経験は、「現在、高齢な家族を介護している」9人、「過去に、高齢な家族を介護していた」20人、「仕事で高齢者介護に携わっている」1人、「その他」3人、「高齢者を介護したことはない」50人。介護経験のない者が多い。その他には「過去に仕事で携わっていた」等があった [図Ⅱ-2]。

認知症の理解は、「よく知っている」44人、「名前だけ知っている程度」35人、「よくわからない」6人。よく知っているが半数である [図Ⅱ-3]。

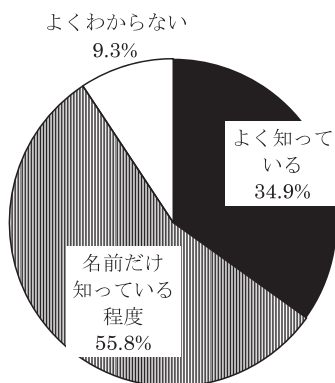
介護保険サービスの理解は、「よく知っている・利用している」30人、「名前だけ知っている程度」48人、「よくわからない」8人。名前だけ知っている程度が6割である [図Ⅱ-4]。



図Ⅱ-1 回答者基本属性：年代

図Ⅱ-2
回答者基本属性：高齢者の介護経験

図Ⅱ-3 認知症の理解

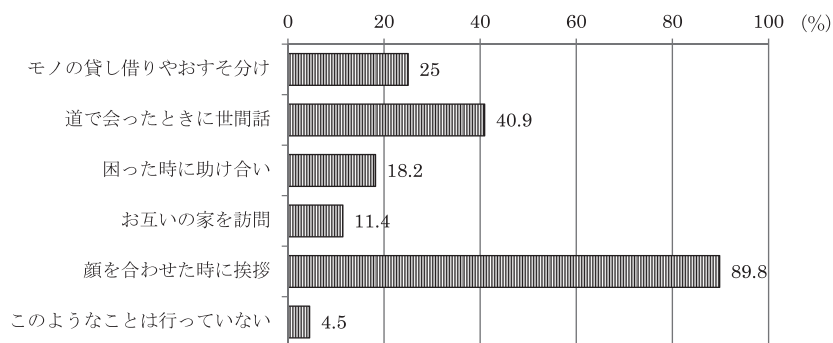


図Ⅱ-4 介護保険サービスの理解

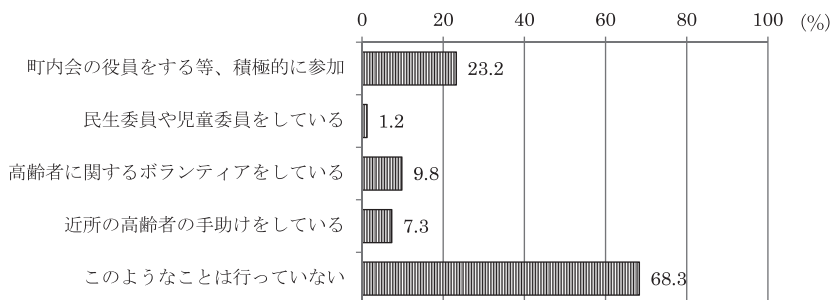
3. 近隣の交流

隣近所との日常的な交流は88人のうち「モノの貸し借りやおすそ分けをする」22人、「道で会った時に世間話をする」36人、「困った時に助け合いをする」16人、「お互いの家を訪問する」10人、「顔を合わせた時に挨拶をする」79人、「このようなことは行っていない」4人。挨拶は9割が行っているが、助け合いや互いの家の訪問は十数%である [図Ⅱ-5]。

町内会の活動等への参加は82人のうち「町内会の役員をする等、町内会活動に積極的に参加している」19人、「民生委員や児童委員をしている」1人、「高齢者に関わるボランティアをしている」8人、「近所の高齢者の手助けをしている」6人、「このようなことは行っていない」56人 [図Ⅱ-6]。



図Ⅱ-5 近隣の交流



図Ⅱ-6 町内会の活動等への参加

「隣近所との日常的な交流」と「町内会の活動等への参加」は関係があり、「町内会の役員をする等、町内会活動に積極的に参加している」者はそうでない者に比べて、隣近所との日常的な交流をしている〔表Ⅱ-1〕。

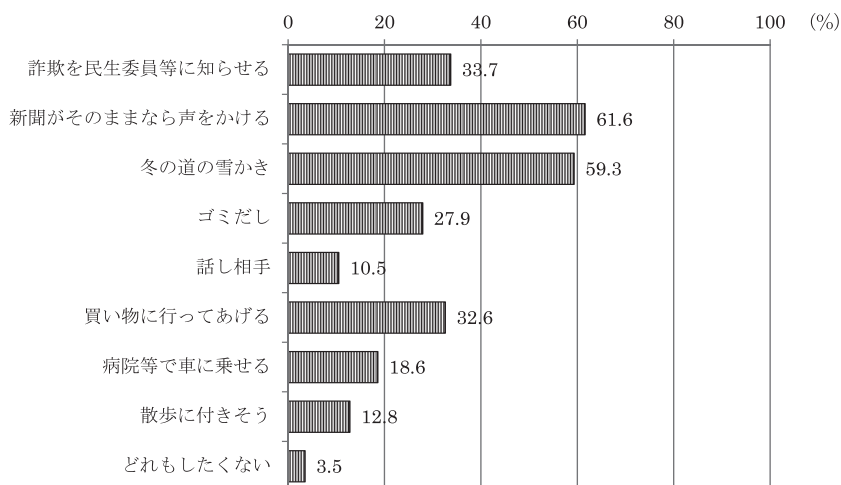
表Ⅱ-1 町内会の活動等への参加 による近隣の交流

	町内会に積極的に参加	していない	計
モノの貸し借りやおすそ分け	7 人 (36.8%)	11 人 (17.5%)	18 人 (22.0%)
道で会った時に世間話	12 人 (63.2%)	20 人 (31.7%)	32 人 (39.0%)
困った時に助け合い	7 人 (36.8%)	5 人 (7.9%)	12 人 (14.6%)
お互いの家を訪問	4 人 (21.1%)	5 人 (7.9%)	9 人 (11.0%)
顔を合わせた時に挨拶	18 人 (94.7%)	55 人 (87.3%)	73 人 (89.0%)
このようなことは行っていない	0 人 (0.0%)	4 人 (6.3%)	4 人 (4.9%)
計	19 人 (100%)	63 人 (100%)	82 人 (100%)

近所に顔見知りの一人暮らしの高齢者が居て、見守りが必要になったとしたとしてもよいと思う手助けは86人のうち「知らない人が頻繁に来る等、詐欺にあっているかもしれないと思ったら民生委員等に知らせる」29人、「いつも取り込まれている新聞がそのままになっていたら、声をかける」53人、「冬の道の雪かき」51人、「ヘルパーがまとめていったゴミを、朝にゴミ収集場所に出してあげる」24人、「デイサービス等に行かない日に、訪問して話し相手になる」9人、「頼まれた買い物に代わりに行ってあげる」28人、「病院等に行くのに車に乗せて行ってあげる」16人、「散歩に付きそう」11人、「どの手助けもしたくない」3人である。「新聞がそのままなら声をかける」、「冬の道の雪かき」が6割程度、「ゴミだし」、「買い物に行ってあげる」が3割程度ある〔図Ⅱ-7〕。

「一人暮らしの高齢者にする手助け」と「隣近所との日常的な交流」、「町内会の活動等への参加」は関係があり、「モノの貸し借りやおすそ分けをする」、「町内会の役員をする等、町内会活動に積極的に参加している」者はそうでない者に比べて、手助けをすると回答している〔表Ⅱ-2、3〕。高齢者の介

護経験による差は見られない。高齢者に対する手助けは、近隣の交流や町内会の活動等への参加によって決まり、介護の経験は必ずしも必要でないことが分かる。



図Ⅱ-7 一人暮らし高齢者にする手助け

表Ⅱ-2 近隣の交流 による一人暮らし高齢者にする手助け

	モノの貸し借りや おすそ分けをする	しない	計
詐欺を民生委員等に知らせる	11 人 (50.0%)	18 人 (28.1%)	29 人 (33.7%)
新聞がそのままなら声をかける	20 人 (90.9%)	33 人 (51.6%)	53 人 (61.6%)
冬の道の雪かき	16 人 (72.7%)	35 人 (54.7%)	51 人 (59.3%)
ゴミだし	8 人 (36.4%)	16 人 (25.0%)	24 人 (27.9%)
話し相手	5 人 (22.7%)	4 人 (6.3%)	9 人 (10.5%)
買い物に行つてあげる	10 人 (45.5%)	18 人 (28.1%)	28 人 (32.6%)
病院等で車に乗せる	4 人 (18.2%)	12 人 (18.8%)	16 人 (18.6%)
散歩に付きそう	3 人 (13.6%)	8 人 (12.5%)	11 人 (12.8%)
どれもしたくない	0 人 (0.0%)	3 人 (4.7%)	3 人 (3.5%)
計	22 人 (100%)	64 人 (100%)	85 人 (100%)

表Ⅱ-3 町内会の活動等への参加 による一人暮らし高齢者にする手助け

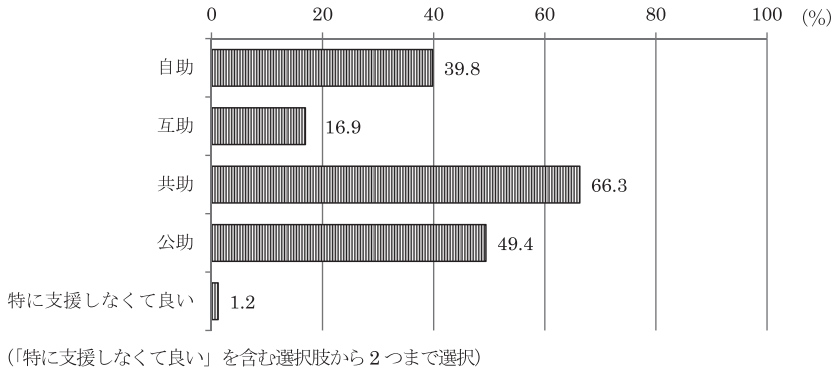
	町内会に積極的に参加	していない	計
詐欺を民生委員等に知らせる	10 人 (55.6%)	16 人 (25.8%)	26 人 (32.5%)
新聞がそのままなら声をかける	13 人 (72.2%)	34 人 (54.8%)	47 人 (58.8%)
冬の道の雪かき	11 人 (61.1%)	35 人 (56.5%)	46 人 (57.5%)
ゴミだし	4 人 (22.2%)	18 人 (29.0%)	22 人 (27.5%)
話し相手	5 人 (27.8%)	4 人 (6.5%)	9 人 (11.3%)
買い物に行ってあげる	7 人 (38.9%)	19 人 (30.6%)	26 人 (32.5%)
病院等で車に乗せる	4 人 (22.2%)	11 人 (17.7%)	15 人 (18.8%)
散歩に付きそう	3 人 (16.7%)	7 人 (11.3%)	10 人 (12.5%)
どれもしたくない	0 人 (0.0%)	3 人 (4.8%)	3 人 (3.8%)
計	18 人 (100%)	62 人 (100%)	80 人 (100%)

4. 自助・互助・共助・公助の支援希望

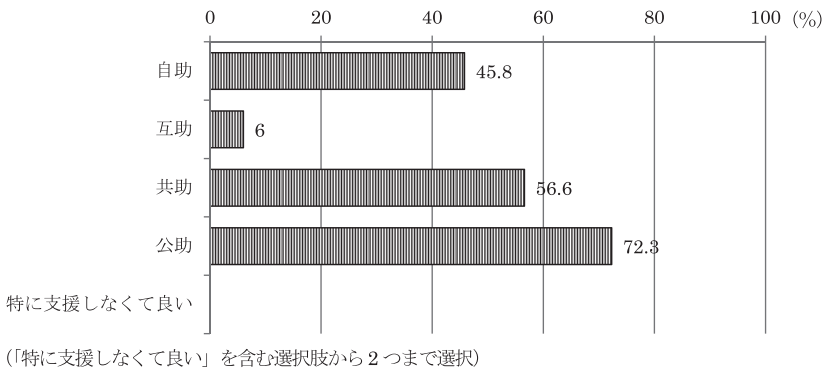
「買い物に行くことが難しい高齢者」に対する支援として83人のうち「特に支援しなくて良い」1人、自助（公的なサービス以外の、介護タクシー・配食等の民間サービスを利用すべきだと思う）33人、互助（近所の人が変わりに買ってくる、車に乗せて行く等、地域の助け合いでカバーすべきだと思う）14人、共助（宅配・移動販売・バス等、多くの店や交通手段が高齢者に配慮して買い物ができるようにすべきだと思う）55人、公助（買い物支援事業・コミュニティバス等、公的なサービスを整備すべきだと思う）41人。共助が最も多く、公助、自助、互助の順である [図Ⅱ-8]。

「食事の支度や洗濯が難しい高齢者」に対する支援として83人のうち「特に支援しなくて良い」という人はおらず、自助（公的なサービス以外の、配食・ヘルパー等の民間サービスを利用すべきだと思う）38人、互助（近所の人が食事を届ける、洗濯をしてあげる等、地域の助け合いでカバーすべきだと思う）5人、共助（弁当宅配・クリーニング等、多くの店が高齢者に配慮して生活できるようにすべきだと思う）47人、公助（配食・ヘルパー等、

公的なサービスが利用できるようにすべきだと思う)60人。公助が最も多く、共助、自助、互助の順である [図Ⅱ-9]。



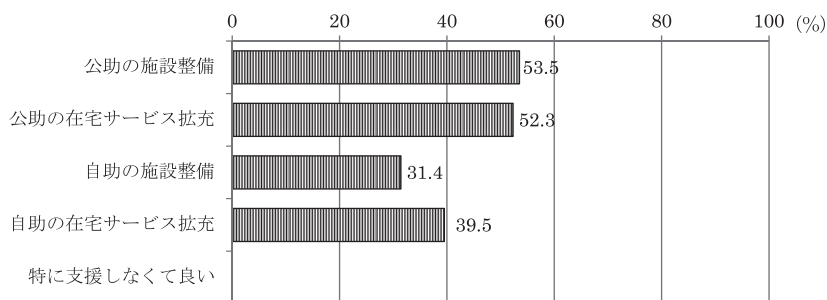
図Ⅱ-8 買い物支援の希望



図Ⅱ-9 家事支援の希望

「在宅生活が難しく施設入所待ちをしている人」に対する支援として86人のうち「特に支援しなくて良い」という人はおらず、自助の施設整備（民間サービスの老人下宿・サービス付き高齢者住宅を増やすべきだと思う）27人、自助の在宅サービス拡充（公的サービス以外のヘルパー等、民間の在宅サービスを利用して在宅生活が続けられるようにすべきだと思う）34人、

公助の施設整備(公的サービスの特別養護老人ホームを増やすべきだと思う) 46人、公助の在宅サービス拡充(公的な在宅サービスを充実して、在宅生活が続けられるようにすべきだと思う) 45人。公助の施設整備及び在宅サービス拡充がほぼ同数であり、自助の在宅サービス拡充、自助の施設整備の順である [図Ⅱ-10]。

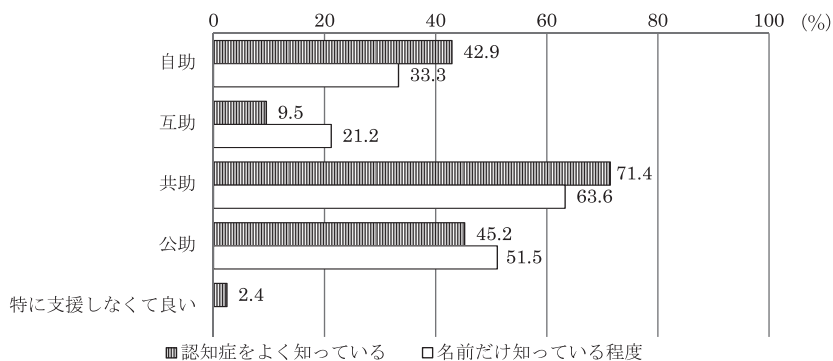


(「特に支援しなくて良い」を含む選択肢から2つまで選択)

図Ⅱ-10 施設入所待ちに対する支援希望

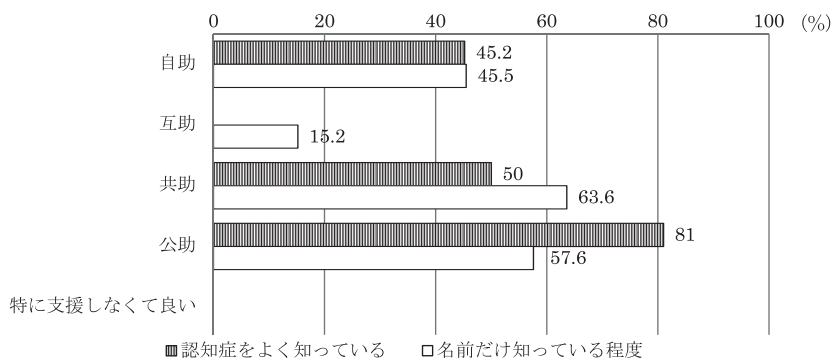
買い物支援については共助、家事支援及び施設入所待ちに対する支援については公助が期待されていることが分かる。いずれも互助、自助は低い。

これらは認知症の理解、介護保険サービスの理解によって若干違いが見られる。認知症や介護保険サービスをよく知っている方が、買い物支援・家事支援ともに互助が低い [図Ⅱ-11、12、14、15]。家事支援については公助が高く、共助が低い [図Ⅱ-12、15]。施設入所待ちに対する支援については施設整備・在宅サービス拡充ともに公助が低く、自助が高くなっている [図Ⅱ-13、16]。認知症や介護保険サービスをよく知っている人は互助への期待がより低く、家事支援については公助を希望しているが、施設入所待ちはこのまでの経験から公助をあてにできず、代わって近年登場している高齢者サービス付き高齢者住宅などに一定の期待をよせていることが推測される。



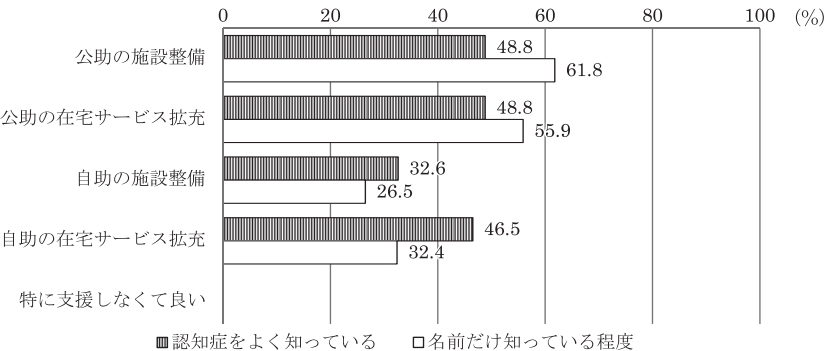
	認知症をよく知っている N=42	名前だけ知っている程度 N=33
自助	18	11
互助	4	7
共助	30	21
公助	19	17
特に支援しなくて良い	1	0

図Ⅱ-11 認知症の理解 による買い物支援の希望



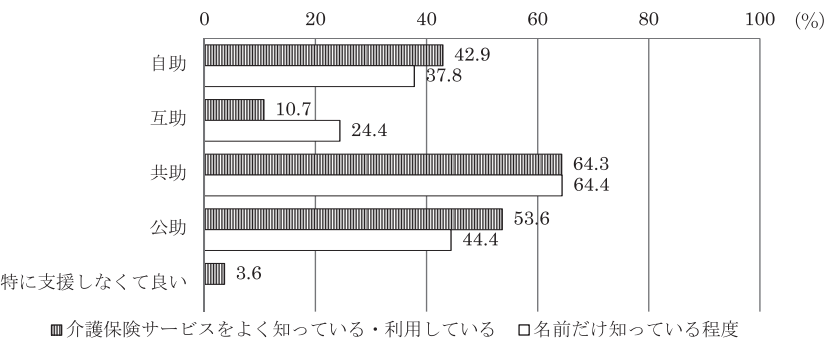
	認知症をよく知っている N=42	名前だけ知っている程度 N=33
自助	19	15
互助	0	5
共助	21	21
公助	34	19
特に支援しなくて良い	0	0

図Ⅱ-12 認知症の理解 による家事支援の希望



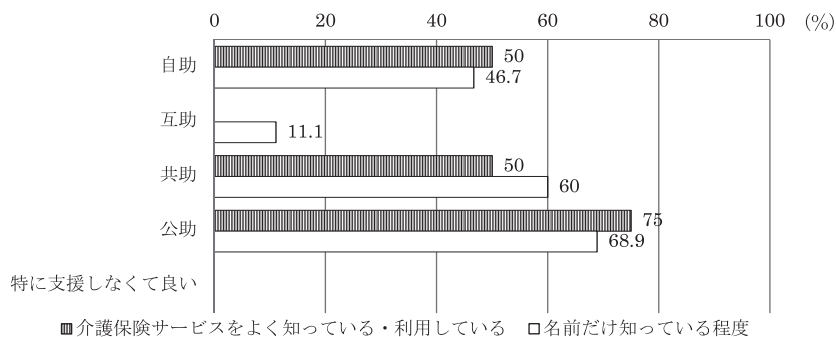
	認知症をよく知っている N=43	名前だけ知っている程度 N=34
公助の施設整備	21	21
公助の在宅サービス拡充	21	19
自助の施設整備	14	9
自助の在宅サービス拡充	20	11
特に支援しなくて良い	0	0

図Ⅱ-13 認知症の理解 による施設入所待ちに対する支援希望



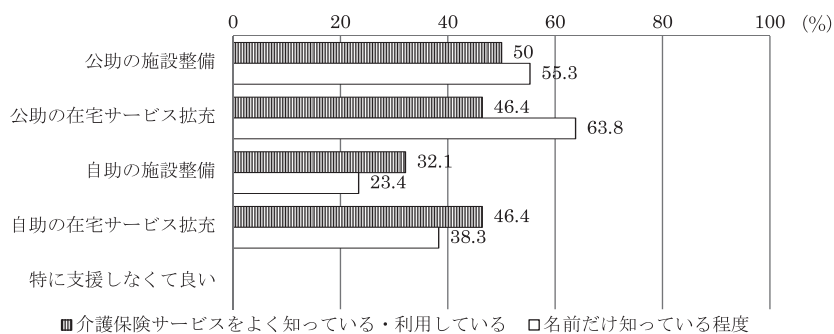
	介護保険サービスをよく知 っている・利用している N=28	名前だけ知っている程度 N=45
自助	12	17
互助	3	11
共助	18	29
公助	15	20
特に支援しなくて良い	1	0

図Ⅱ-14 介護保険サービスの理解 による買い物支援の希望



	介護保険サービスをよく知っている・利用している N=28	名前だけ知っている程度 N=45
自助	14	21
互助	0	5
共助	14	27
公助	21	31
特に支援しなくて良い	0	0

図Ⅱ-15 介護保険サービスの理解 による家事支援の希望



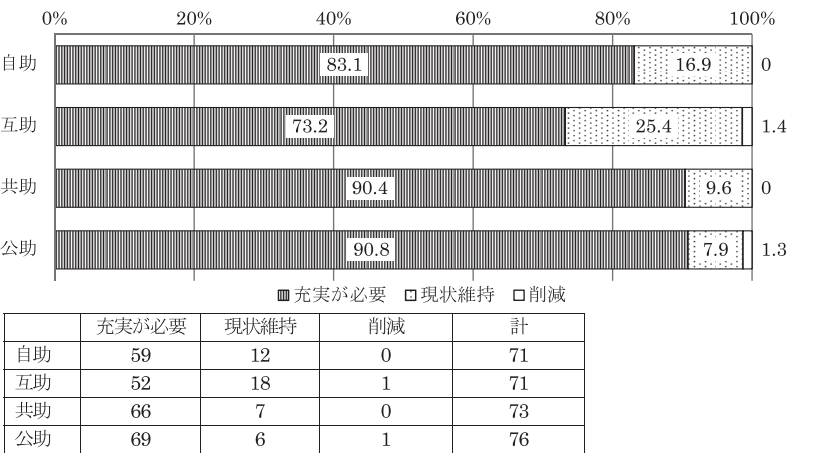
	介護保険サービスをよく知っている・利用している N=28	名前だけ知っている程度 N=47
公助の施設整備	14	26
公助の在宅サービス拡充	13	30
自助の施設整備	9	11
自助の在宅サービス拡充	13	18
特に支援しなくて良い	0	0

図Ⅱ-16 介護保険サービスの理解 による施設入所待ちに対する支援の希望

5. 自助・互助・共助・公助の必要性と実現可能性

超高齢社会の函館において何が必要か尋ねたところ、自助（公的サービス以外の民間サービス）、互助（地域の助け合い）、共助（多くの店や交通機関等の高齢者への配慮）、公助（公的サービス）のいずれも7～9割が「充実が必要」と答えており、共助・公助で高かった [図Ⅱ-17]。これらは認知症や介護保険サービスの理解によって若干違いが見られ、認知症や介護保険をよく知っている方が共助・公助で「充実が必要」と回答している人の割合がやや低くなる [表Ⅱ-4、5]。

この自助・互助・共助・公助の充実が実現可能か尋ねたところ、いずれも6～8割が「実現可能」と答えており、互助・公助で低かった [図Ⅱ-18]。これらは認知症や介護保険サービスの理解によって若干違いが見られる。認知症や介護保険サービスをよく知っている方が、自助・公助の充実が実現可能と回答している人の割合が低く、共助の充実が実現可能と回答している人の割合がやや高くなる [図Ⅱ-19、20]。認知症や介護保険サービスをよく知っている人は、自助・公助の充実の実現の厳しさを感じており、共助の充実により期待していることが推測される。



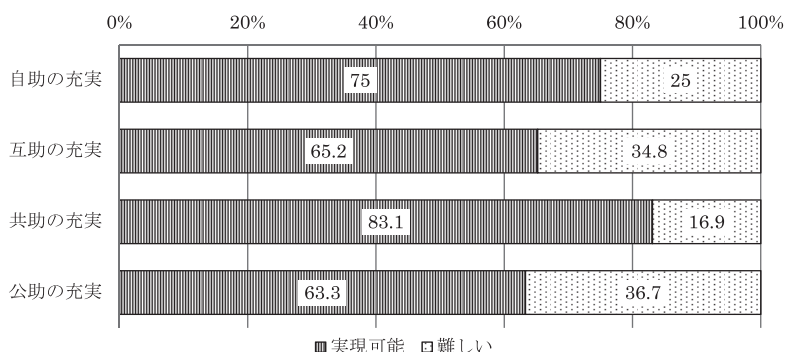
図Ⅱ-17 地元における自助・互助・共助・公助の必要性

表Ⅱ-4 認知症の理解 による地元における
自助・互助・共助・公助の必要性

	認知症をよく知っている	名前だけ知っている程度
自助の充実が必要	29人／35人 (82.9%)	23人／28人 (82.1%)
互助の充実が必要	22人／33人 (66.7%)	25人／31人 (80.6%)
共助の充実が必要	30人／36人 (83.3%)	29人／30人 (96.7%)
公助の充実が必要	32人／38人 (84.2%)	29人／30人 (96.7%)

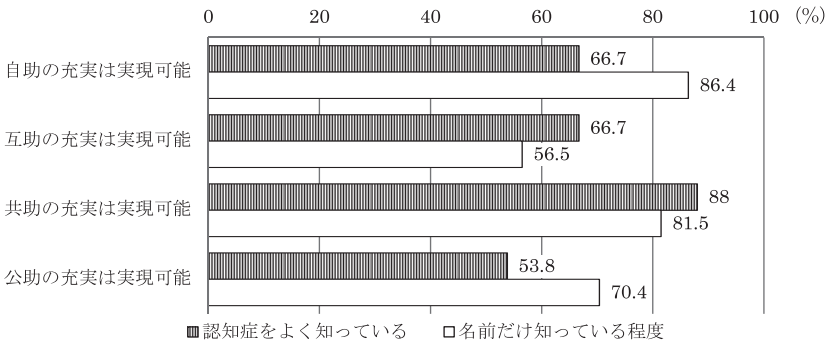
表Ⅱ-5 介護保険サービスの理解 による地元における
自助・互助・共助・公助の必要性

	介護保険サービスをよく知っている・利用している	名前だけ知っている程度
自助の充実が必要	21人／26人 (80.8%)	32人／37人 (86.5%)
互助の充実が必要	18人／25人 (72.0%)	27人／37人 (73.0%)
共助の充実が必要	21人／26人 (80.8%)	39人／39人 (100%)
公助の充実が必要	20人／26人 (76.9%)	40人／41人 (97.6%)



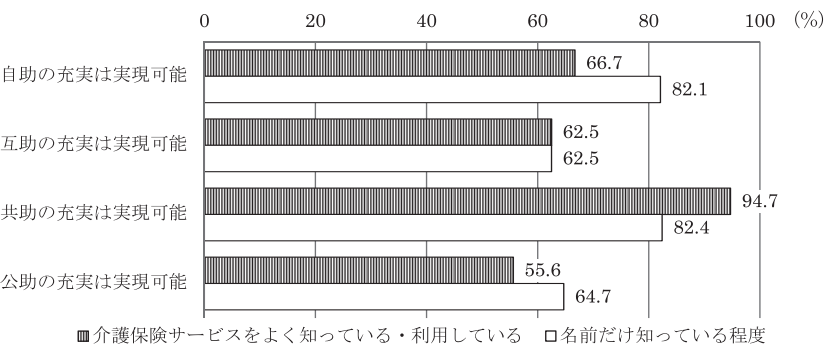
	実現可能	難しい	計
自助の充実	39	13	52
互助の充実	30	16	46
共助の充実	49	10	59
公助の充実	38	22	60

図Ⅱ-18 地元における自助・互助・共助・公助の充実の実現可能性



	認知症をよく知っている	名前だけ知っている程度
自助の充実の実現可能	16 人／24 人	19 人／22 人
互助の充実の実現可能	12 人／18 人	13 人／23 人
共助の充実の実現可能	22 人／25 人	22 人／27 人
公助の充実の実現可能	14 人／26 人	19 人／27 人

図Ⅱ-19 認知症の理解 による地元における
自助・互助・共助・公助の充実の実現可能性



	介護保険サービスをよく知っている・利用している	名前だけ知っている程度
自助の充実の実現可能	12 人／18 人	23 人／28 人
互助の充実の実現可能	10 人／16 人	15 人／24 人
共助の充実の実現可能	18 人／19 人	28 人／34 人
公助の充実の実現可能	10 人／18 人	22 人／34 人

図Ⅱ-20 介護保険サービスの理解 による地元における
自助・互助・共助・公助の充実の実現可能性

6. 高齢社会の不安

「老いる」ことについて、「とても不安」8人、「不安」48人、「不安はない」30人。「とても不安」と「不安」で6割を超える【図Ⅱ-21】。不安な理由は「健康状態」、「やれることができなくなる」、「経済」、「子どもがいない」などの具体的なことから「経験がない」というものもある。他方で不安はない理由として「不安に思っけていても仕方ない」、「なんとかなるだろう」、「実感がない」などがある。

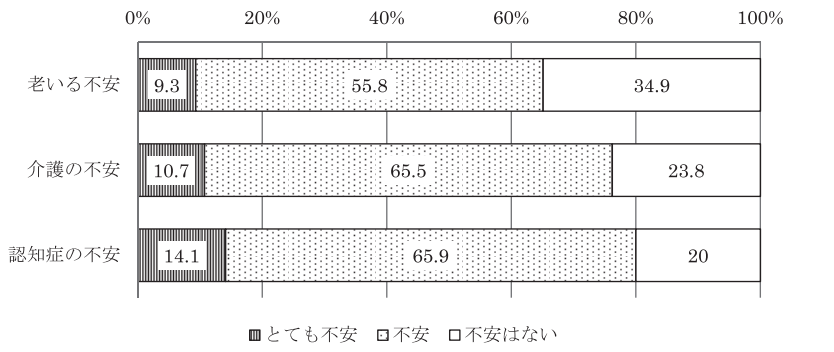
自分や家族の介護について、「とても不安」9人、「不安」55人、「不安はない」20人。「とても不安」と「不安」で75%を超える【図Ⅱ-21】。不安な理由は「一人暮らしなので」、「介護方法が理解不足」、「体力的に負担になる」、「子どもに迷惑がかかる」などがある。他方で不安はない理由として「娘がみてくれる」、「仕事でしているから」などがある。

自分や家族が認知症になるかもしれないことについて、「とても不安」12人、「不安」56人、「不安はない」17人。「とても不安」と「不安」で8割にのぼる【図Ⅱ-21】。不安な理由は「いつになるか分からない」、「一人で暮らせず、施設不足」、「まわりに迷惑をかけるのではないか」などがあり、「時々物忘れ」、「前兆らしきものを感じているから」、「母がなっているから」などの認知症の可能性を心配する意見もある。他方で不安はない理由として「娘が見てくれる」、「あるがまますを受け入れる」、「考えても仕方ない」などがある。

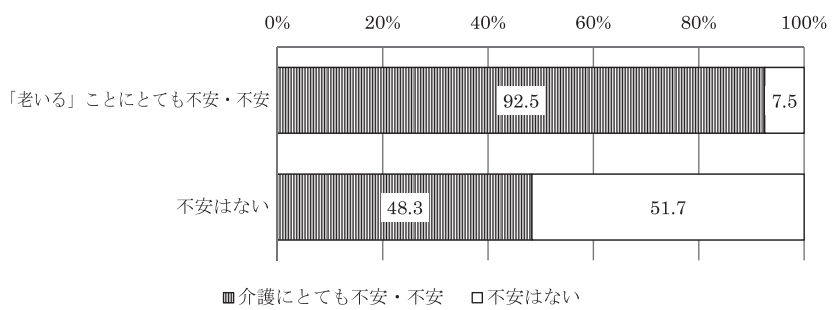
これらの3つの不安には関係があり、「老いる」ことに不安を感じている方が介護や認知症について不安を感じている【図Ⅱ-22、23】。

加えて、「老いる」ことに不安を感じている方が互助の充足が必要と回答している割合がやや高い【図Ⅱ-24】。なお、現状の近隣の交流や町内会の活動等への参加による差は見られない。逆に、自助・互助・共助・公助の充足の実現可能性を見ると、互助で若干違いが見られ、互助の充足が難しいと思っている方が「老いる」ことに不安を感じている【図Ⅱ-25】。他の自助・共助・公助は充足が実現可能であっても、困難であっても「老いる」不安に

差は見られない。つまり、現状の近隣の交流等にかかわらず、一層の互助の充足が必要と感じているものの、その充足が難しいと思うことが不安の一つの要因となっていると推測される。

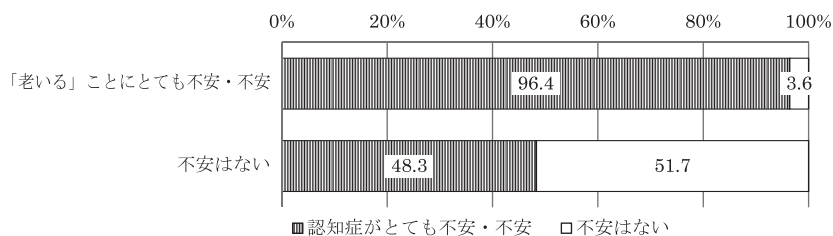


図Ⅱ-21 不安



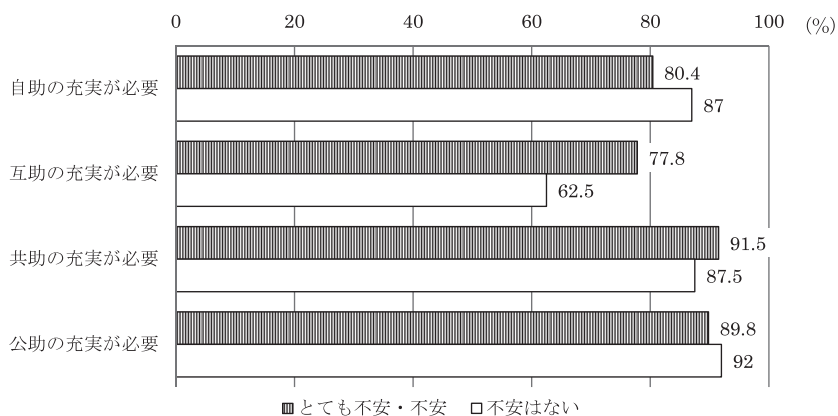
		介護の不安		
		とても不安・不安	不安はない	計
「老いる」不安	とても不安・不安	49	4	53
	不安はない	14	15	29
	計	63	19	82

図Ⅱ-22 「老いる」不安 と介護の不安



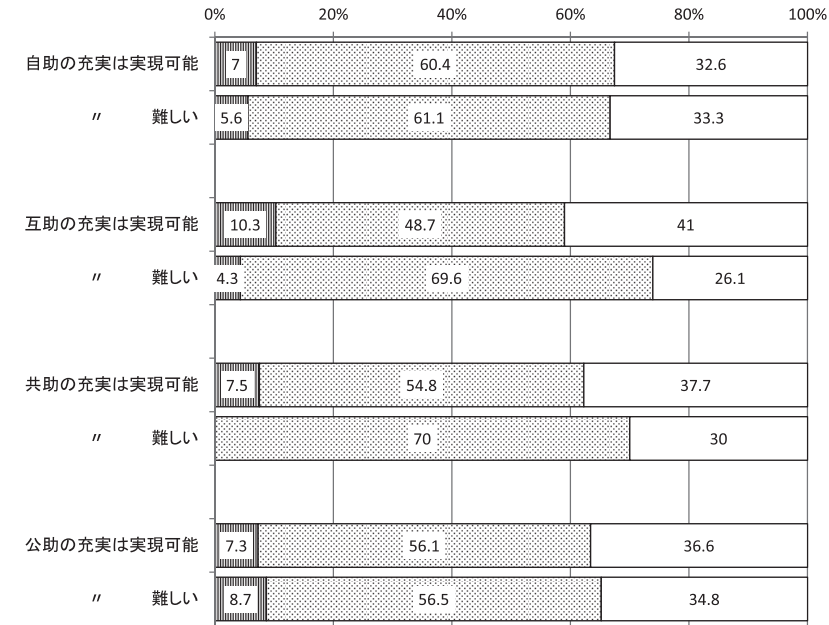
		認知症の不安		
		とても不安・不安	不安はない	計
「老いる」不安	とても不安・不安	53	2	55
	不安はない	14	15	29
	計	67	17	84

図Ⅱ-23 「老いる」不安 と認知症の不安



	「老いる」ことにとても不安・不安	「老いる」ことに不安はない
自助の充実が必要	37人／46人	20人／23人
互助の充実が必要	35人／45人	15人／24人
共助の充実が必要	43人／47人	21人／24人
公助の充実が必要	44人／49人	23人／25人

図Ⅱ-24 「老いる」不安 と地元における自助・互助・共助・公助の必要性



■「老いる」ことにとっても不安 □不安 ○不安はない

	「老いる」こと にとっても不安	不安	不安はない	計
自助の充実が実現可能	3	26	14	43
〃 難しい	1	11	6	18
互助の充実が実現可能	4	19	16	29
〃 難しい	1	16	6	23
共助の充実が実現可能	4	29	20	53
〃 難しい	0	7	3	10
公助の充実が実現可能	3	23	15	41
〃 難しい	2	13	8	23

図Ⅱ-25 地元における自助・互助・共助・公助の充実の
実現可能性 と「老いる」不安

Ⅲ. まとめ

「老い」への不安は、介護や認知症の不安と関係があり、3つの不安の根は同じところにある。その不安と関連するのは互助である。現状の近隣の交流等にかかわらず、一層の互助の充足が必要と感じているものの、その充足が難しいと思っている者で不安が感じられている。

近年、公助の大幅な拡充が難しいとされ互助・自助が求められているが、市民の支援希望は別の所にある（買い物支援については共助、家事支援及び施設入所待ちに対する支援については公助が期待されており、いずれも互助・自助は低い）。認知症や介護保険サービスをよく知っている方が互助への期待がより低く、支援が互助によって代えられるとは考えられていない。

地元の社会資源については多くの人が自助・互助・共助・公助ともに充実の必要性を感じており、充実の実現可能と回答している。しかし、認知症や介護保険サービスをよく知っている人は、自助・公助の充実の難しさを実感している。残る互助と共助のうち、共助の充実により期待している。

一人暮らし高齢者に対する手助けに見られるように、互助は近隣の交流や町内会の活動等への参加によって決まる。背景として超高齢社会をうけて、近隣と活発に交流し、町内会の活動等を担う層が薄くなり、互助の維持が難しくなっていることがすけて見える。

介護保険制度の財政難などから互助が求められる一方で、超高齢社会において担い手も高齢化し、さらなる充実が難しい状況にある。この食い違いが「不安」を生んでいる。認知症や介護保険サービスをよく知っている人が期待する共助の充実に加えて、施設入所に代わるサービス付き高齢者住宅などの一部の自助、家事支援などの公助の維持を複合的に図っていくことが必要である。

文 献

- 1) 地域包括ケア研究会；平成24年度厚生労働省老人保健事業推進費補助金（老人保健健康増進事業分）地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点、三菱UFJリサーチ&コンサルティング、2013年
- 2) 共助社会づくり懇談会；共助社会づくりの推進に向けて ―論点の整理と今後の議論の進め方について、内閣府、2013年
- 3) 大橋美幸；超高齢社会における「不安」の構造（第2報） ―サービス付き高齢者住宅と近隣の助け合い意識調査より、函館大学論究第43輯、2012年